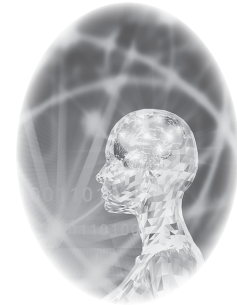


特集：本シェルジュがオススメする
ヒトや中小企業診断士の AI との付き合い方

終章

AI ブームは終わる？



村上 知也

神奈川県中小企業診断協会

1. ブームの問題点

今回の特集では AI をテーマにしましたが、私自身は最近のいわゆる「AI ブーム」には食傷気味です。毎日のように AI のニュースが取り上げられ、AI の展示会は身動きができないくらいの盛況。まさに AI ブームと呼ばれる状況ではないでしょうか。そしてブームとは多くの場合、近い将来に終わるものです。

なぜブームが終わるのか。それは実態以上に期待値が高まっているからです。今は多くの商品やサービスが、AI というキーワードだけをつけて情報発信をしています。そのほうが話題になるとわかっているからでしょう。そして、結果的にうまくマスコミなどに取り上げられているケースもあります。

しかし、その中身は本当に、ブレークスルーが起きるほどの AI を使っているのでしょうか。今後の私たちには、その見極めが必要になると思います。話題性だけで人を呼べても、中身がなければ実際は活用されないと思うからです。

2. AI を見極める

AI の見極めのポイントとしては、本特集第 1 章の安藤氏のパートにあった AI レベルについて、ぜひもう一度確認してほしいと思

います。

現時点で AI と呼んでもいいのは、レベル 3 以上でしょう。そして、これからすごいことが起きるかもしれないのは、レベル 4 以上だけです。

そして、レベル 4 ですごいことが起きるためには大量のデータが必要です。たとえば、将棋や囲碁なら過去に何千、何万の棋譜があります。さらに AI が自分自身で対戦して、数え切れないほどの膨大な棋譜データを生成しました。そのおかげで、将棋や囲碁の AI は、ついに人間がかなわないレベルに到達しました。

一方で、採用活動で AI を使うというのがあります。たしかに大手の採用サイトには、今までの膨大な採用データがあると思います。しかし、採用する側には、データは少ししかありません。

たとえば、年に 10 人を採用する中小企業では、社歴が 30 年あっても 300 人分のデータです。そして時代によって欲しい人材のモデルは異なってきます。

そうすると、必要な人材に関するデータはさらに少ないのです。そのようなデータ数でレベル 4 の AI を活用することは困難と言えるでしょう。

AI が「御社にとって最適な人材を見極めます」というのは、特に中小企業にとっては無理難題なわけです。

図表 AI のレベル

レベル 4	ディープラーニング AI ↓ 何を判断するかの特徴も自動で判断する
レベル 3	機械学習 AI ↓ 何を判断するかの特徴は人間が指定
レベル 2	古典的な AI ↓ 人間ができる限りきめ細かくルールを設定し、多くの知識を与える
レベル 1	単純な制御プログラム ↓ ルールに従って処理するだけ

3. AI のこれからの活用にあたって

AI にネガティブな印象を記載しましたが、実態以上に虚像が大きくなるのが問題だけで、私自身も非常に AI には期待しています。

たとえば、写真が犬の顔なのか、猫の顔なのかを見分けるのは、大したことではないようですが、実はすごいことだと思っています。犬の顔を文字で表現するのは大変です。「目が2つで、鼻が1つで尖りぎみで、耳は2つで頭の上についている……」くらいではとても犬だと判断できないでしょう。

膨大な犬の顔写真データを読み込み、人間が特徴を指示することなく、犬の顔の特徴をデータ化して、その後、犬の顔なのかそうでないかを見極めるわけです。実際、すごいことなのです。

人間がやると非常に手間がかかる作業を、過去の莫大なデータからディープラーニングして、見極めることで、あっという間に効率化される。そして、そのプログラムがすでに無料で利用できるように提供されています。中小企業にとっても活用するチャンスがかなりある内容だといえます。

一部のテクノロジー企業だけではなく、中

小企業も活用できる AI の進展は、かなり期待できると思います。いわゆる「AI ブーム」が終わった後、実際に活用するタイミングでは、中小企業診断士としてもこういった真の AI 分野の動向を把握して中小企業に伝えていきたいと思っています。